

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	久島 桃代 【ジェンダー学際研究専攻 平成22年度生】	要 旨
論文題目	農村に移住する若い女性と身体化される「場所」 —福島県昭和村からむし織体験生・織姫の語りから—	<p>本論文の目的は、著者が卒論以来フィールドワークを続けている福島県奥会津地方昭和村を対象に、からむし織の体験織姫制度を通じて来村した若い女性たちが、なぜその後も多く村に残り続けるのかを、からむしと身体、場所との関係性において考察することである。</p> <p>第1章では、研究の背景と目的が示され、都市からの若者の農村への移住が大きな社会的注目を集めていることが語られる。</p> <p>第2章では、農村空間の商品化をめぐる議論が紹介され、そこでは主体である移住者の意識や実践が十分に捉えられていないことが指摘される。</p> <p>第3章では、人文主義地理学における場所と身体への注目、フェミニスト地理学によるその批判、非表象地理学における身体的実践への着目の順に、人文地理学における身体と場所をめぐる議論がレビューされる。</p> <p>第4章では、昭和村の概要が示され、著者が村入りをした際の体験を織り交ぜながら、移住者の目から見たその社会的な特質が記述される。</p> <p>第5章では、植物として、商品作物として、暮らしの一部としてのからむしの特質が詳しく記述され後、織姫制度の創設の経緯が語られる。</p> <p>第6章では、本研究の対象となった11名の織姫たちのプロフィールが紹介された後、4名の織姫へのライフストーリー・インタビューが、調査者（聞き手）と語り手の対話的相互作用として提示される。</p> <p>第7章では、織姫であることが村で持つ意味が、その利点と問題点の双方から検討される。織姫はこの制度によって地元を受け入れられやすいが、経済的には自立が困難であり、結婚しない限り一時滞在者・よそ者であり続ける。その立場性から生まれる「刹那的な場所感覚」が語られる。</p> <p>第8章では、織姫たちがからむしを通じて獲得する身体感覚が語られ、それが昭和村という場所に惹きつける源泉となっていることが示される。</p> <p>第9章では、結論が語られる。都市との交流・嫁不足の解消という村側の企図を超えてからむしが織姫たちに与える身体性をともなう魅力は、経済的基盤を与えるものではなく、単身の織姫たちは一時的な滞在者としての刹那的な場所感覚を生きざるを得ないが、それが逆に彼女たちの体験を濃密なものともしている。さらに「あとがき」では、著者がフィールドワークを通じて獲得された反省的認識と知見が示されている。</p>
審査委員	(主査) 教授 熊谷 圭知	
	教授 水野 勲	
	教授 棚橋 訓	
	准教授 荒木 美奈子	
	准教授 中島 弘二	